



「ベートーベンの曲には宮本武蔵の精神を感じる」
—東京都杉並区で、三浦博之撮影

殺気、いや妖気が漂っていた。やせた古武士が真剣を振っているようだ。あれは何年前だったろう。東京芸術劇場(池袋)、ベートーベンの交響曲第五番。指揮者のうなり声が客席にまで聞こえてきた。「小さな巨人」「孤高の指揮者」と言われる宇宿允人さんを見たのはそれが初めてだった。

順風満帆に見えた音楽家人生を捨てたのは1982年。それから年に4〜5回、演奏会のたびに奏者を集めて「宇宿允人の世界」を開いている。運営費は乏しい。26年間に178回開いたが、宇宿さん自身はただの10円も得たことはない。若手指揮者でも1ステージ350万円と言われているのである。

「もろたらつぷれますもん。芸術家として自分の精神が5万や10万もらってダメになったら、こんなに惨めなことはない。総理大臣も給料はなし。麻生総理に言いたい。」

神の和音紡ぐ 古武士のタクト

「倒れるまで闘う」指揮者 宇宿允人さん

うすきままと 1934年、京都市生まれ。東京芸大卒。N響のトロンボーン首席奏者を経て、35歳で大阪フィル専任指揮者。来年1月に第179回「宇宿允人の世界」を開く。

2兆円(定額給付金)は芸術に回せ」
寄せ集めのオーケストラで、本番前の練習は3日間だけ。すべて公開している指揮者はほかにいない。秋の午後、東京都北区の滝野川会館に練習を見に行った。ドアを開けると、弦楽器の激しい音が室内を駆け巡っていた。ピバルディの「四季」。音の粒子が渦になり、天井にぶちあたって加速し、それが私の体を貫いて行った。

△商業主義に迎合しない厳しい音楽姿勢、苛烈ともいえるほどの練習風景と宣伝のチラシに書かれている。一流の演奏者にも罵詈雑言を浴びせ、つかみかかる。女性バイオリニストの尻を引っぱたく。体ばかり大きくなって、お前は脳に栄養が行かないん

だ。そうかと思えば、独特な比喩で指導する。「地球の軸が回転するようなエネルギーが欲しい」「トイレではパンツを脱いでから座れ」
客にも容赦はない。「この前も口論になったんです。年配の男性が「先生、ちょっと厳しいんじゃないですか。若いメンバーと温度差を感じる」と言う。あなた、なに言ってるんだ。温度差を埋めるために練習してるんじゃないか。」「いや、そんなつもりじゃあ……。一挙に引き上げようとするの無理があるかと思ってる。引き上げなきゃ聴衆は力尽きて言うよ!」
そんな言動が同会館を管理する北区の議会で問題にされたことがある。「使用承認の基準に該当しない」(北区教委)という理由で来年度からは使えなくなった。

死に神がよく話しかけてくる。「もうちょっと待ってくれ。若い演奏家を育てたいんだ」。ニヤリと笑って死に神はそこに立っている。
そば屋で働いている演奏家がいる。パーでバイオリンを弾いている女の子もいる。「おい、おんちゃん弾いてみな」。酔客に言われ、だんだん惨めになって、才能のある子がや

めていく。自分の音楽を安売りしちゃいけない。君たち、楽な仕事しちゃうだめだ。駅のトイレ掃除とかビル掃除をやる。帰ってから手を洗い、オーボエ吹いたり、ホルン磨いたりするんだ」
切ないですね。
「切ないですよ」
感動させる芸術をやりたいだけだ。何人も殺した死刑囚にも聞かせたい。人間の精神を取り戻してから死んでほしい。音楽を大事にしてほしい。△目が痛くなるほど感動した。公開練習を聞いた子供言葉が忘れられない。

第178回「宇宿允人の世界」は東京湾を望む第一生命ホール(東京都中央区)で開かれた。モーツァルトの荘厳なシンフォニーが洪水のように客席になだれ込む。200年の時を超え、神に与えられた和音が古武士のタクトから導き出される。気高くあなたか音が、この世界の瞬間を満たしていく。
拍手喝采が鳴りやまない客席に孤高の指揮者は語りかけた。年金もらってぬくぬくしているなら死んだ方がいい。倒れるまで、死ぬまで、私は闘います。どうかこのオーケストラを育ててください」
泣きたくなるような優しい雨が街をぬらした夜だった。

【野沢和弘】

